

TSUBOHORI

平成7年度(1995)

姫路市埋蔵文化財調査略報



姫路市教育委員会

はじめに

姫路は播磨の中心に位置し、播磨国分寺跡、壇場山古墳、瓢塚古墳、書写山円教寺など、数多くの重要な遺跡があります。近年の本市の発展はめざましく、それに伴う発掘調査件数も増加してまいりました。貴重な文化財発掘調査の成果については、速やかに市民の皆様を提供し、共有の財産として保存・継承していかなければなりません。成果の報告には長時間にわたる整理・研究が必要であります。こうしたことから、なるべく早期に発掘調査の成果を伝えるための速報として本書を刊行いたしました。

その内容は必ずしも十分とはいえませんが、発掘成果の一端を速やかに公開することにより、教育委員会の行っております埋蔵文化財の発掘調査事業についての理解を深めていただき、地域の歴史をひもとく手助けになれば幸いです。

終わりにになりましたが、発掘調査を実施するにあたり、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長

井上 隆 溥

例 言

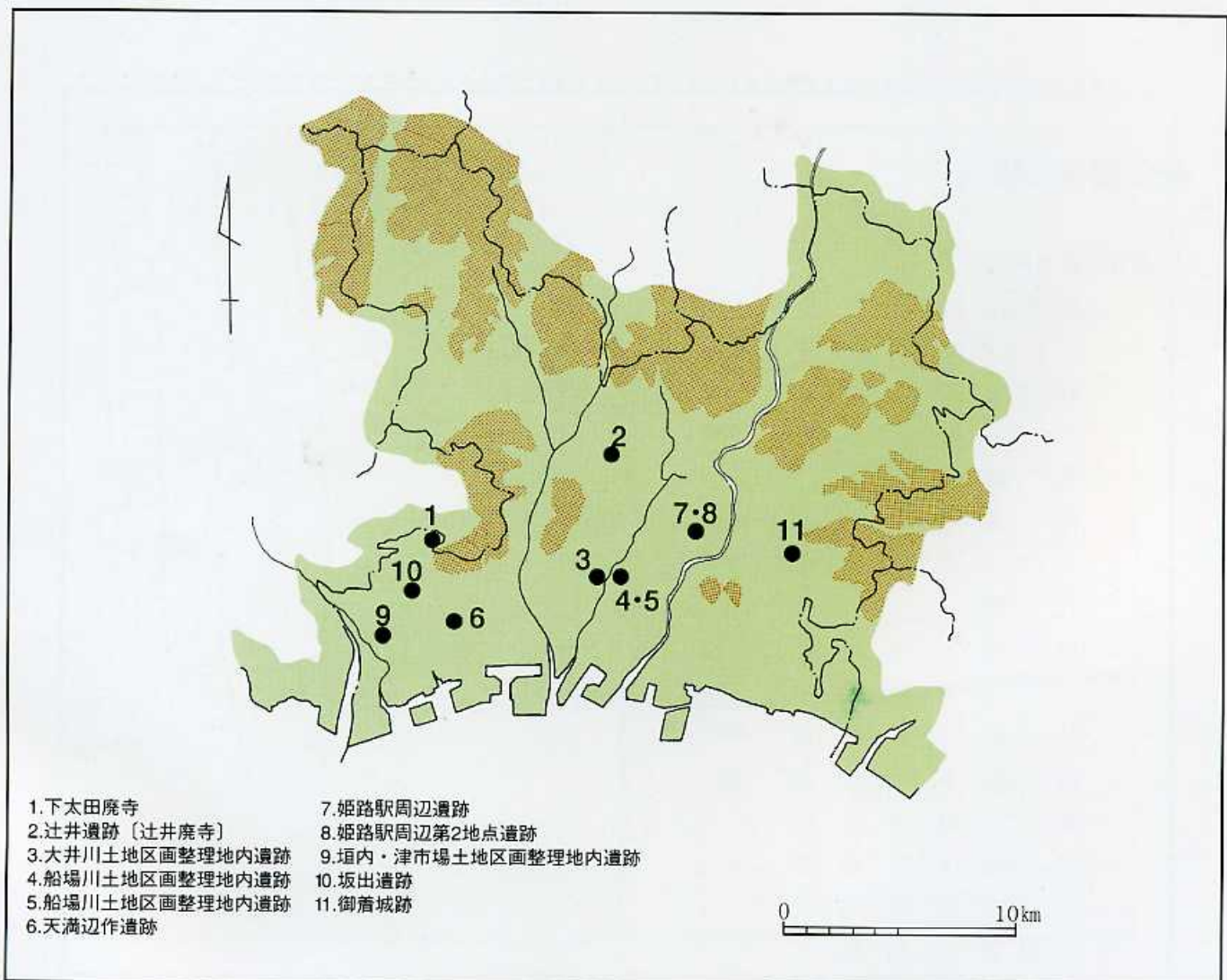
1. 本書は、姫路市教育委員会が平成7年度(1995)に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。なお、特別史跡姫路城跡に関する発掘調査については、『城郭研究室年報』6において別に報告している。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、全て姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は多田が担当した。
4. 各調査地の位置図は姫路市2万5千分の1図を使用し、方位は上が北である。
5. 本書の図面は国土座標(第V系)を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を使用した。
6. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。
石田幸作、石田高義、石田芳郎、今里幾次、大塚元治、亀田修一、幸田 俊、佐々木俊介、高橋 学、
藤原 学、森田 稔、吉田年数
下太田自治会、兵庫県教育委員会
7. 図版の作成には、門田真理、田口啓美、中山美歩、円尾かさね、山田郁子の補助を得た。
8. 表紙の写真は、下太田廃寺第2トレンチを西側から撮影したものである。

市内の発掘調査の動向

平成7年度は、古代寺院の調査が2カ所で実施された。姫路市西部、勝原区の下太田廃寺と、名古山の北西に位置する辻井廃寺である。どちらも水田中に塔の心礎が残り、早くから寺院跡として注目されてきた。特に、下太田廃寺に発掘調査のメスが入るのは今回が最初となる。県指定史跡として保存されている塔跡に対し、不明な点の多い伽藍配置などの解明が期待された。調査では、寺域の西限と南限が確認されたほか、巨大な柱根が発見されている。下太田廃寺の南側750メートルには、国指定史跡の瓢塚古墳がある。その整備も日程にのぼりつつあり、『風土記』の大田里として古代の地域構造の解明が待たれる。

辻井廃寺の発掘は、今回で第23次となる。こちらは下水管理設に伴うもので調査面積も狭い。しかし、調査区は寺域の中心部を南北に通じ、遺跡の南北断面の情報が得られた。

一方、土地区画整理事業に伴う発掘調査は相変わらず多い。大井川、船場川、東天満、姫路駅周辺の4カ所で、土地区画整理の道路予定地を調査した。このうち大井川土地区画整理事業地内遺跡は、昭和61年度からの調査も今回で9年目となる。大井川土地区画整理事業に伴う発掘調査としては最終年度となった。このように事業が終了する遺跡がある一方で、姫路駅周辺や網干区の垣内・津市場では、土地区画整理に先立つ遺跡の確認調査も始まっている。また船場川では、土地区画整理地内の建物建設に伴う発掘も行われた。今後はこのような土地区画整理事業



平成7年度 発掘調査位置図

業完了後の開発による発掘も急増してくるであろう。

調査の結果、大井川では平安時代後半から室町時代頃の井戸や掘立柱の建物跡などが見つかり、室町時代末頃の溝からは犬形土製品が出土した。船場川では旧河道と平安時代後半頃の溝、東天満では室町時代の土坑と井戸が発掘されている。姫路駅周辺では、弥生時代中期や古墳時代の竪穴式住居跡や土坑、平安時代の掘立柱建物跡と幅広く遺構が確認された。

この他、小面積ながら坂出遺跡や御着城跡で発掘調査が実施され、御着城跡では本丸北側の大型堀が確認された。また、発掘によるものではないものの、荒川地区の四ッ池では堤防工事中に大型の鳥形木製品が発見されている。

以上、平成7年度の調査をふりかえって特徴的なことは、中世遺跡の発掘が多いことである。平成6年度には縄文土器や弥生土器が出土した東天満や、いままで中世と共に弥生時代の遺構・遺物が確認されていた大井川でも、今年度は中世遺構のみの確認となった。遺物でも、御着城跡に続いて市内で2例目の犬形土製品の発見などが新聞を賑わせた。これらの成果により、古代から近世をつなぐ姫路市域の開発の様子が明らかになっていくものと期待される。さらに、地域的には下太田廃寺や垣内・津市場など市域の西部で新たな調査が開始された。今後の展開が注目される。

埋蔵文化財に対する普及活動としては、姫路市立美術館を会場に「新発見考古速報展'95」が平成8年1月9日から1月28日までの期間で実施された。あわせて「兵庫地域展」も行い、姫路市からは長塚古墳と御坊ヶ山1号窯の出土遺物を出品している。この時、地域展図録「かきかえられたひょうごの歴史」も作成し、調査成果の市民への還元に努めた。

●発掘の体制

教育委員会事務局

教育長 前田 一 忠（～平成7年6月30日）
井上 隆 溥（平成7年7月1日～）
教育次長 本城 章 宏（～平成7年6月30日）
森 茂 樹（平成7年7月1日～）

文 化 部

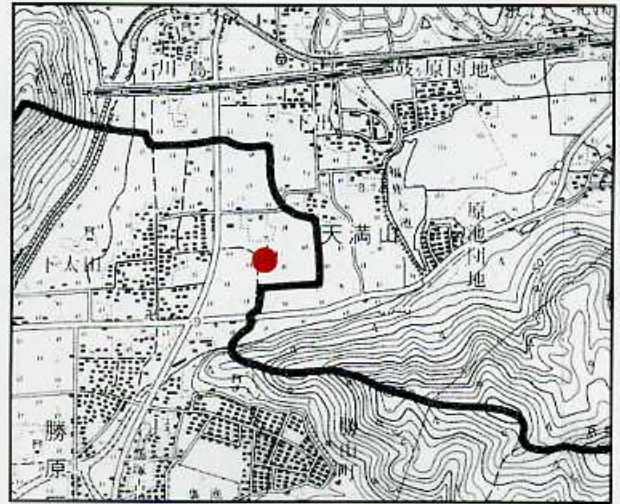
部 長 三木 庸 義（～平成7年6月30日）
池田 宏（平成7年7月1日～）

文 化 課

課 長 山下 紀 年（～平成7年6月30日）
北野 壹 功（平成7年7月1日～）
係 長 中山 智 雄
主 事 森 雅 子
係 長 秋 枝 芳
技 師 大谷 輝 彦
技 師 多田 暢 久
技 師 補 小柴 治 子

1. 下太田 廃寺 (第1次調査)

- 1. 所在地 姫路市勝原区下太田字ツクワ他
- 2. 調査面積 975㎡
- 3. 調査期間 平成8年2月20日～平成8年3月18日
- 4. 担当者 大谷、多田、小柴

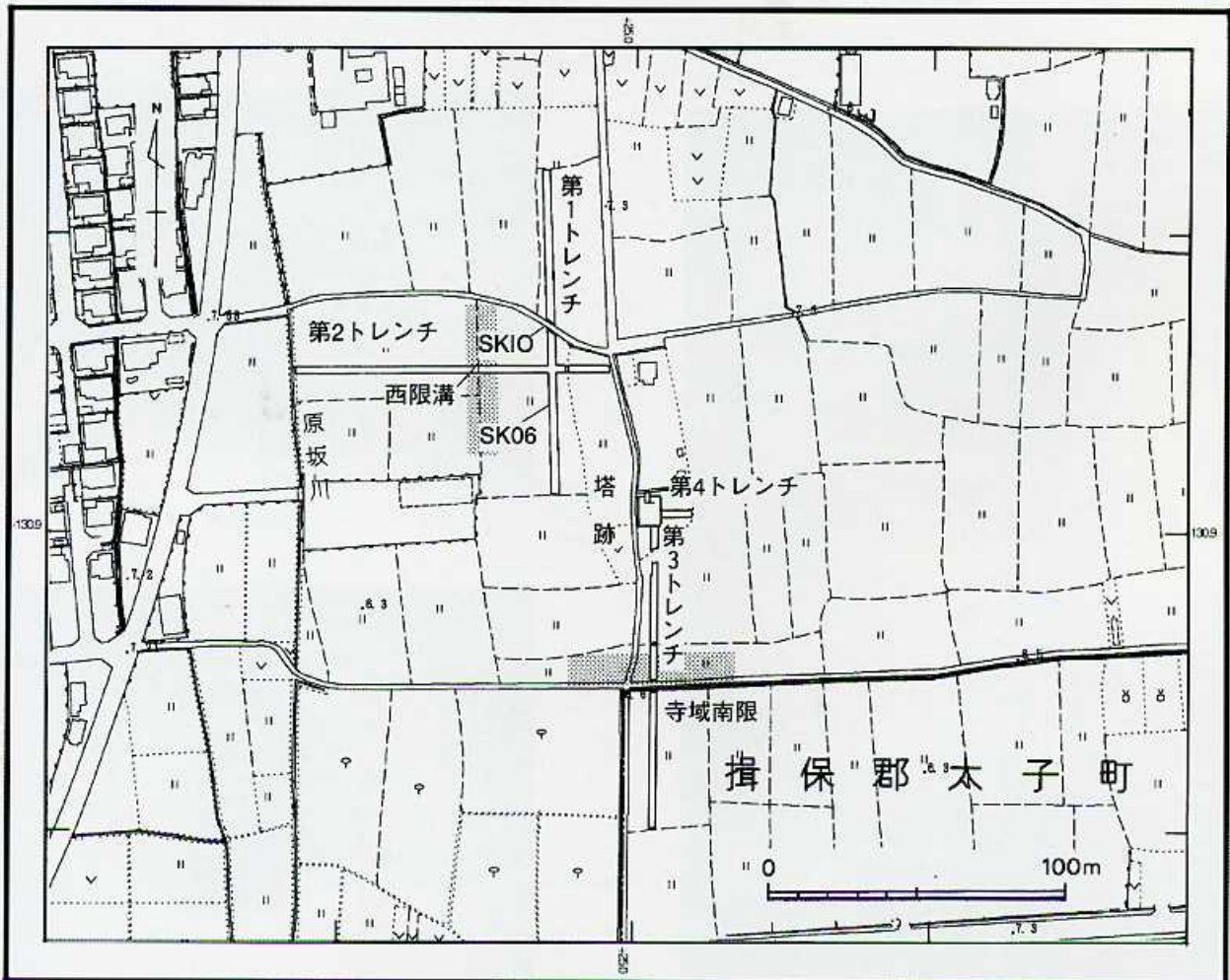


調査地の位置

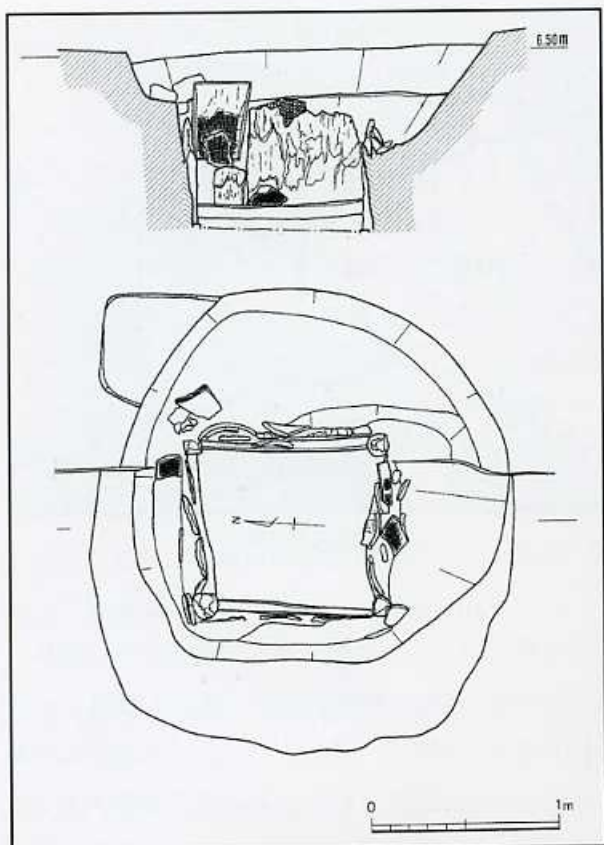
下太田廃寺が、広く認識されるようになったのは昭和の初期である。当時から水田中に土壇状の高まりがあり、中心には心礎が露出していたことから、これが塔跡であることは明確であった。しかしながら、塔以外の伽藍配置は明らかでなく、また寺域も不明であった。周囲の水田からは、地元の大塚元治氏によって多量の瓦が採集されている。これらの採集瓦から、この廃寺の創建は、白鳳時代（7世紀末）とされていた。

今回の発掘調査は、初めて行われる本格的な調査である。寺域の西・南・北限と塔跡の規模・構造を解明することを目的として4本のトレンチ（試掘溝）調査を行った。

第1トレンチ北部では、方形掘方の柱穴などが数基あるが、北限を示す施設は見つからなかった。南部では、井



下太田廃寺 トレンチ配置図 (S=1:2500)



第1トレンチ2区 井戸 (SK10) (S=1:40)



第3トレンチ 2・3区 (南から)

戸 (SK10) や柱根 (SK06) を検出した。

第2トレンチの中程では、南北方向の溝 (SD01) を検出した。この溝から西側は、旧河道となることから、これが寺域西限を示していると考えられる。

第3トレンチ南部では、幅約2.5メートルで東西方向の高まりが見つかった。南・北両側には、多量の瓦が散布し、築地塀を思わせる。ここからさらに南に5メートルほどで地形は急速に落ち込み、沼あるいは湿地のような状況を示す。この付近が南限と思われる。

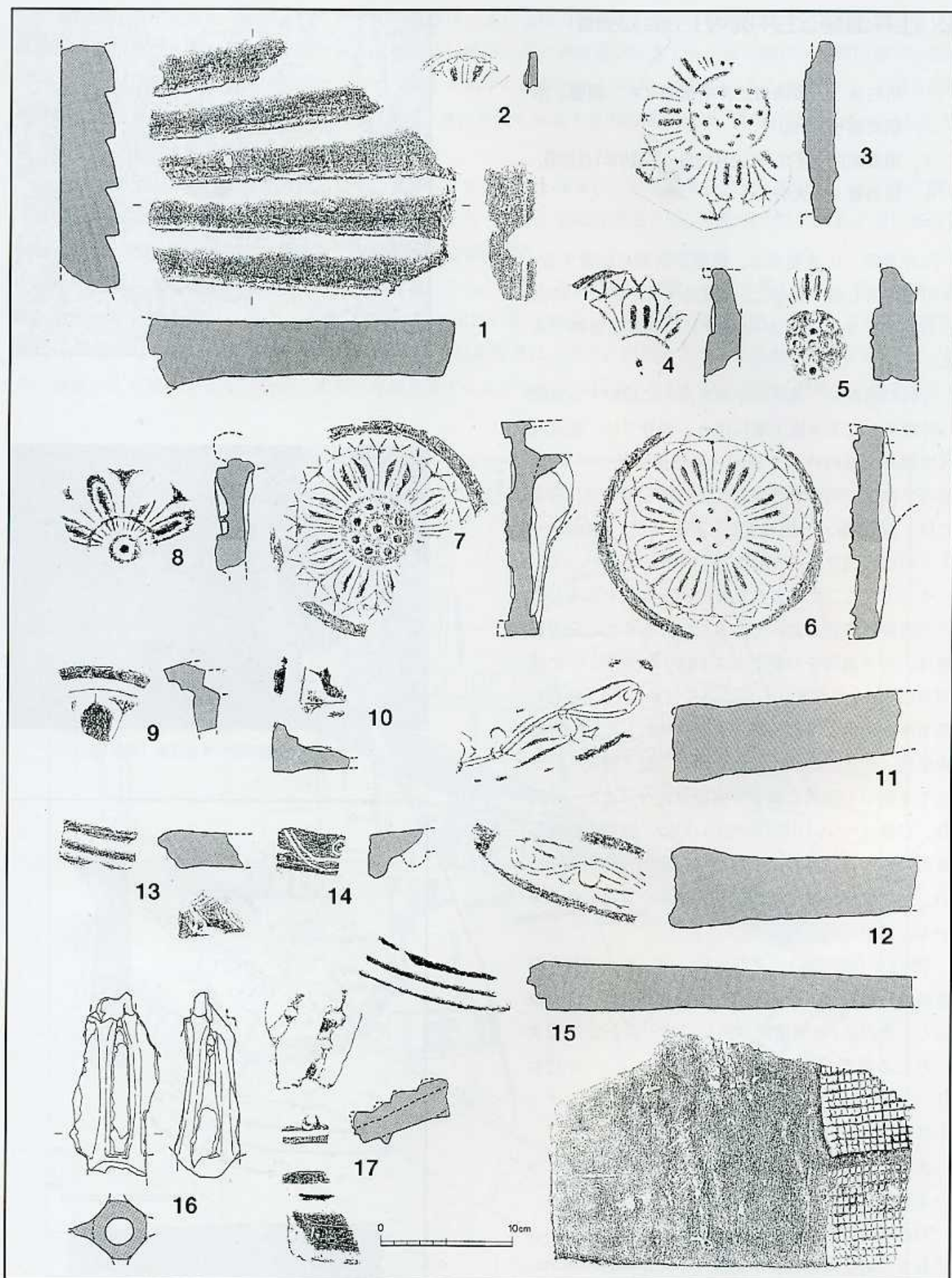
第3トレンチ北部、第4トレンチでは、基壇盛土など塔に関係するものは見つからなかった。出土遺物には、蓮華文帯鴟尾、軒瓦、瓦塔などがある。軒丸瓦では、細線鋸歯文縁複弁八葉蓮華文を中心として9種、軒平瓦では、均整忍冬唐草文など7種が確認された。時期は、大きく2分されると思われ、古いものは7世紀後葉、新しいものは、8世紀後半に位置づけられる。



第2トレンチ 寺域西限溝 (SD01、北から)



第1トレンチ 柱根 (SK06、東から)



下太田廃寺出土瓦実測図
(S=1:4)

1、15 第1トレンチSK10
5、9 第3トレンチ南部

2 第2トレンチ

3、4、7、16 第1トレンチ北部

6、8、11~14、17 第3トレンチ北~中部

10 第1トレンチ南部

2. 辻井遺跡(辻井廃寺) (第23次調査)

1. 所在地 姫路市辻井字東藤ノ木、西藤ノ木
2. 調査面積 190㎡
3. 調査期間 平成7年12月15日～平成8年1月22日
4. 担当者 大谷

辻井遺跡・辻井廃寺は、姫路市西郊に位置する。水田中に塔心礎が現存し、周辺から瓦、縄文・弥生土器が出土することから戦前より著名な遺跡である。

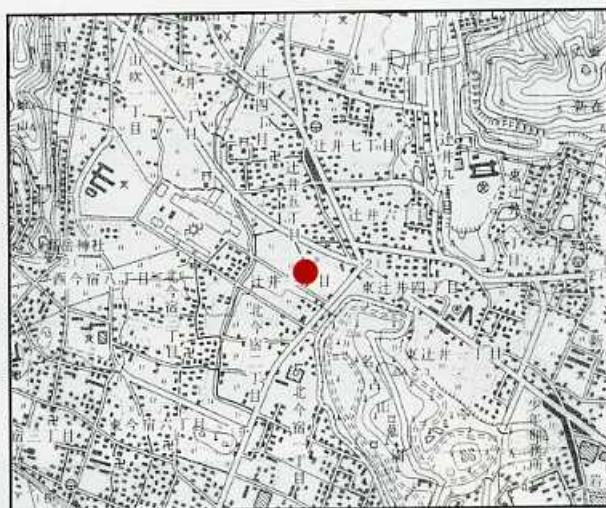
今回の調査は、遺跡の中央を南北に縦断する里道に計画された下水道工事に伴う。調査では、弥生時代中期と奈良時代（7世紀）の遺構が見つかった。前者では、中期中葉の竪穴式住居跡5棟など、後者には、溝15条、土坑3基などがあるが、幅0.9メートルの狭い調査区のため、不明な部分が多い。

そこで、ここではこれまでの調査成果を加味してこの遺跡の概要を述べておきたい。初めての発掘調査は、辻井遺跡を対象として1940年(昭和15)に浅田芳郎氏、今里幾次氏らによって行われ(A1地点)、縄文中期後半とされる屈葬人骨を検出した。その後、今里氏、松本正信氏、加藤史郎氏、松下勝氏らによって4回の小規模な調査が実施された(A2、A3、B、C地点)。1970年(昭和45)には、姫路市教育委員会(松本、加藤)がこの周辺の範囲確認調査を行い、辻井遺跡の縄文時代包含層がかなり攪乱されていることが判明した。

1982年(昭和57)、道路建設に伴って大規模な発掘調査が始まり、辻井廃寺にも調査が及ぶようになった。その後、寺域確認や開発に伴う調査など22次にわたる調査(延べ面積1万平方メートル)が行われた。これは、予想される遺跡の規模(11ヘクタール以上)の約1割に相当する。

次に、これまで確認された時代の遺構・遺物について時期を追って見ていきたい。

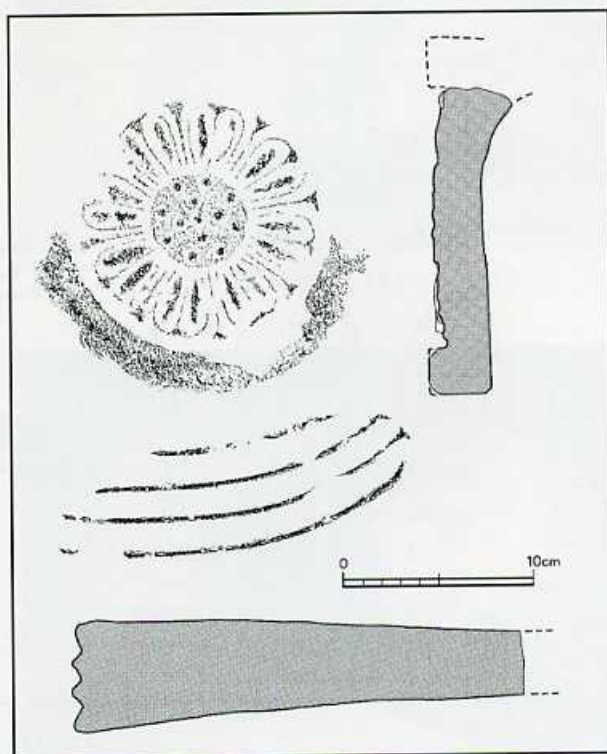
旧石器時代は、ナイフ形石器1点が出土したのみである。縄文時代は、中期後半から晩期前半を中心とし、晩期後半にも続く。遺跡の東半部で土器が大量に出土するが、遺構はほとんど確認されていない。



調査地の位置



弥生時代中期の竪穴式住居跡(北から)

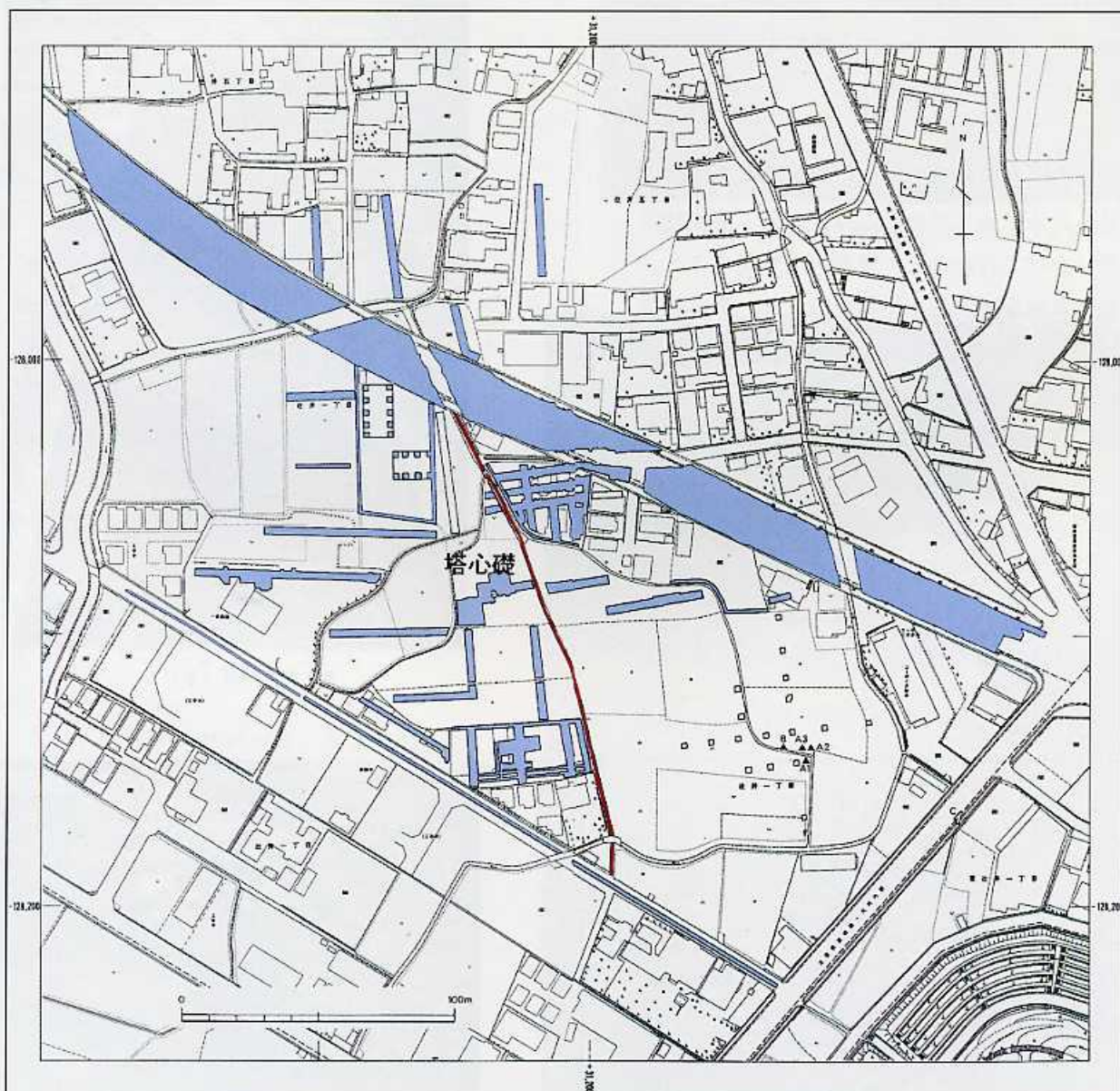


辻井廃寺(第23次調査)出土瓦実測図(S=1:4)

弥生時代は前期後葉から始まる。この時期の遺構は、主に土坑であるが、分布は極めて希薄である。中心となる時期は中期中葉で、遺跡のほぼ全域に竪穴式住居跡14棟以上などの遺構が分布する。住居跡は、平面円形で、径4～10メートルの規模を持ち、同一場所での建て替えを示すものも少なくない。後期には遺構は激減し、平面方形の竪穴式住居跡が数棟確認されただけである。また、遺跡東端を南流する旧河道からは、詳細な時期は不明であるが、竪杵、鋳柄などの木製品も出土している。

奈良時代は、辻井廃寺創建を画期として、大きく7世紀前半と後半に2分される。ただし創建は、瓦の年代観—7世紀末—が最も有力である。前半の遺構は、およそN-2°-Wの方位をとる。主なものは、南北2間×東西5間で北・東・西面庇付の掘立柱建物など合計5棟の建物跡がある。

後半の遺構—辻井廃寺は、方位をN-9°-Wにとる。主なものは、礎石建物（南北2間×東西5間、西庇、東も可能性あり、講堂跡？）、僧坊跡2棟（南北2間×東西13間、南庇、南北9間×東西2間、東庇、どちらも掘立柱）、南門跡（1間四方、掘立柱）、井戸などがある。伽藍配置は法隆寺式が想定されているが、金堂推定地からは、その痕跡さえも見つかっていない。また、寺域を画するような施設も検出されていないため、規模も不明である。



辻井遺跡・辻井廃寺これまでの調査区配置図（S=1：2500）

3. (仮称)

大井川土地区画整理事業地内遺跡

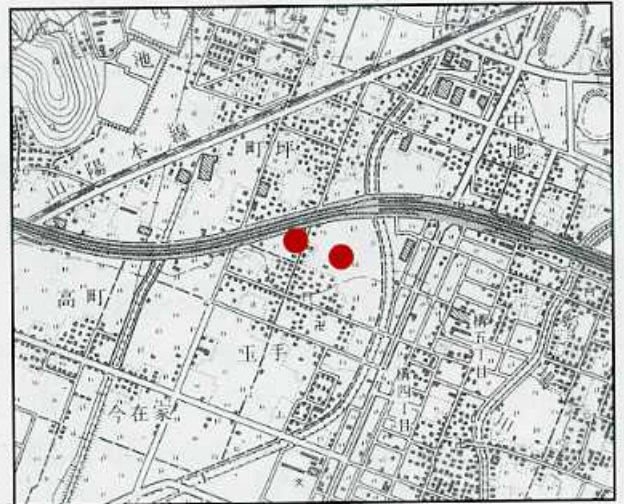
第1・2地点 (第11次調査)

1. 所在地 姫路市玉手
2. 調査面積 2,717㎡
3. 調査期間 平成7年7月13日～平成7年11月9日
4. 担当者 大谷、多田、小柴

手柄山の南西、約1.5キロメートルに位置する玉手の集落。この集落周辺が大井川土地区画整理事業地内遺跡である。その名のとおり区画整理に合わせて調査が進められてきた。これまでに、弥生時代と中世（平安時代後半～室町時代）を中心とする遺構や遺物が出土している。今回の調査でも中世の井戸や掘立柱建物跡などの遺構や、犬形土製品などの遺物が見つかった。

玉手を含む大井川一帯では、広い範囲に条里型の地割が見られる。条里型地割とは、奈良・平安時代から中世にかけて行われた一種の区画整理のこと。また、地区東側を流れる水尾川流域には、八反長遺跡や堂田遺跡、構・権現遺跡など縄文・弥生から古墳時代の遺跡が数多く知られている。近くの町坪や付城には構居と呼ばれる室町時代の城跡もあり、このあたりが古くから開発されていたことを示す。今回の調査では、このような姫路市平野部の開発過程の一端として、玉手の集落の形成過程の解明が期待された。

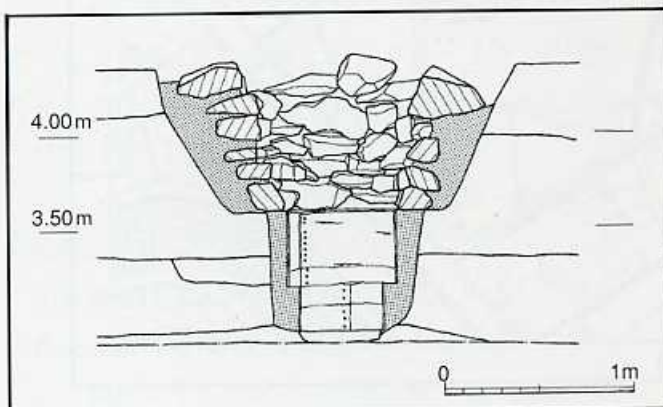
遺跡は第1から第6地点に分かれ、今回は集落の



調査地の位置



第1地点14区 (東から)



第1地点14区 石組み井戸断面図 (S=1:40)



第1地点14区 石組み井戸 (東から)

北東にあたる第1地点と北西の第2地点を調査した。

第1地点では、西部の1,924平方メートルを調査した。遺構は、玉手の集落に接した西端の調査区で多く発見されている。13区では、南北4間×東西3間の掘立柱の建物跡と土坑、多数のピットが見つかった。掘立柱建物跡は北東隅の柱穴を欠き、その部分には2間×2間の柱間の異なる掘立柱建物跡が建つ。さらに建物の東側には、半間分けて南北方向の柱穴が並ぶ。一方、14区では、土坑や多数のピットと共に石組みの井戸が見つかった。井戸は掘方の直径が約1.9メートルで、内側の直径が約1メートル。深さは検出面から約1.4メートルで、上から80センチメートルが河原石を積んだもので、その下は曲物の枠となる。曲物は2段になっており、上段は直径58センチメートル、高さ40センチメートルで、下段は直径44センチメートル、高さ24センチメートルとなる。これまでの調査でも石組み井戸が見つかったが、曲物枠を二段にしたものは初めてである。

時期は、掘立柱建物跡が柱穴内の土器からみて平安時代後半頃、石組み井戸が平安時代末から鎌倉時代頃と推定された。その他の土坑やピットも同じ時期の遺構とみられる。このように、第1地点西部では、これまでの東部の調査と異なり、弥生時代の遺構や遺物はほとんど見られない。

集落北側の第2地点は、793平方メートルを発掘した。ここを面的に掘るのは、今回が初めてである。第2地点の中央には、条里型地割の区画溝が南北に走る。調査区は、この溝をはさんで東側を1・2区、西側を3区とした。

1・2区では、南北4間×東西1間以上の掘立柱の建物跡や土坑、溝などが確認された。土坑からは、平安時代後半から鎌倉時代初めの須恵器の椀が出土している。2区の西端では、南北溝の東肩が検出された。これは条里型地割の区画溝の一部で、ここからは、犬形土製品が見つかった（「こんなものでました」18ページ参照）。

3区では、素掘りの井戸や溝、掘立柱の建物跡などが出土している。こちらは、溝内から瀬戸の灰釉合子、備前焼の插鉢・甕、土師器皿などが出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

今回の調査区域は、玉手集落に近接していた。見つかった遺構のほとんどが、平安時代後半から室町時代のものであることは、現在の集落の形成や発展がこの頃にあったことを窺わせる。



第2地点2区 犬形土製品が見つかった溝（北東から）



第2地点3区（北から）

4. (仮称)

船場川東土地区画整理事業地内遺跡

第6地点9区 (第11次調査)

1. 所在地 姫路市飯田字大屋敷119-1
2. 調査面積 314㎡
3. 調査期間 平成7年5月9日～平成7年7月7日
4. 担当者 大谷

船場川は、姫路平野の中程を南流する小河川である。流域には、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺跡が多数分布している。

この地域に位置する船場川東地区では、区画整理に伴って行われた10次にわたる調査で、縄文時代晩期から平安時代にかけての遺跡が新たに6カ所確認された(第1地点～第6地点)。今回の調査では、南流する旧船場川を検出した。この旧河道は、弥生時代から古墳時代にかけては川の流れを保っていた。その後徐々に埋まっていき、平安時代には、水田に利用されたことが判明した。



調査地の位置



調査区全景 (西から)

5. (仮称)

船場川東土地区画整理事業地内遺跡

第6地点10区 (第12次調査)

1. 所在地 姫路市飯田字大屋敷
2. 調査面積 612㎡
3. 調査期間 平成7年11月28日～平成8年3月13日
4. 担当者 多田

調査地は、全域に深さ1.5メートル以上の河川による堆積があった。これは第11次調査と同じく船場川の旧河道とみられる。現在、船場川は手柄山の南で西側へカーブしているが、弥生から古墳時代頃にかけては、そのまま南へ流れていたと考えられる。

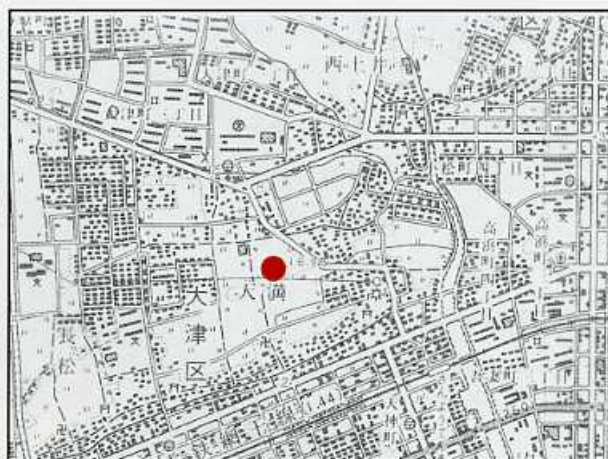
河川埋没後の面では、南北方向の溝が検出された。溝は調査区の中程で東へ曲がり、それ以上北へは続かない。幅1メートル・深さ30センチメートルで、水田の区画か用水の溝と推定される。遺物はほとんど出土しなかった。しかし第9次調査では、溝の南側の続きで平安時代後半頃の瓦器椀が出土している。その頃までに川は徐々に埋まり、水田化していたのであろう。



調査区全景 (南から)

6. 天満辺作遺跡 (第3次調査) 東天満土地区画整理事業地内

1. 所在地 姫路市大津区天満字辺作
2. 調査面積 277m²
3. 調査期間 平成7年5月9日～平成7年7月7日
4. 担当者 多田



調査地の位置

飾磨平野の南部、大津区や飾磨区には、東西方向に数本の海岸砂堆が見られる。海岸砂堆とは旧海岸線の砂丘が微高地として残ったもの。辺作遺跡はそのような砂堆の上にあり、調査前は畑となっていた。

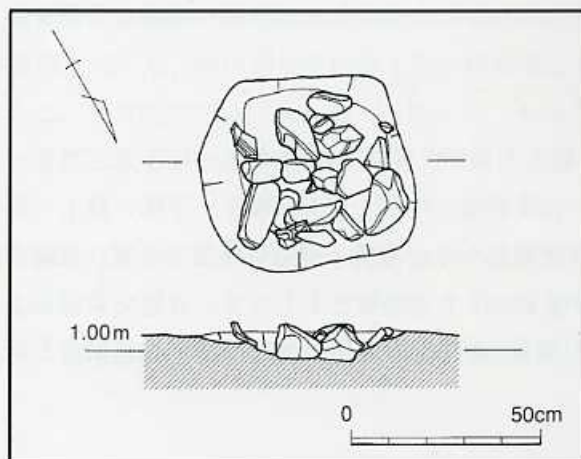
平成6年度の調査では地下約1メートルで、縄文時代後期から弥生時代前期の土器や、弥生時代末の吉備産壺形土器などが出土している。今回の調査では、そのすぐ北側を発掘した。耕作土をめくると、室町時代の備前焼や土師器が含まれた暗灰褐色の土層となる。その下は褐色の砂層で、遺物を全く含まない。これは、砂堆が形成された時の層と推定された。比較的浅いところでこの砂層が出てきたことは、調査地周辺が砂堆中央部であることを示す。昨年度の調査で出土した縄文から弥生時代の土器も、この辺りで使われたものが流れ込んだと考えられる。

遺構については、井戸と多数の土坑が見つかった。井戸は石組みで、中央には曲物が据えられていた。井戸・土坑ともに遺物の出土量は少ない。ただ、土坑の一つからは、こぶし大の石と共に瓦や室町時代末の備前焼播鉢の破片が出ている。遺構の時期も、室町時代頃の可能性が高いであろう。

辺作遺跡では、縄文から弥生時代と室町時代頃を中心とした遺構・遺物が見つかった。その後は、現代まで畑となっていたと推定される。



調査区北西部の遺構検出の状況 (南東方向から)



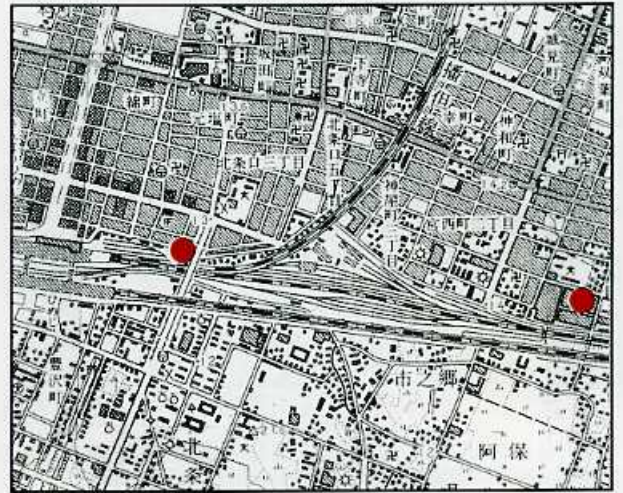
備前焼播鉢が出土した土坑 平断面図 (S=1:20)



写真 (北から)

7. 姫路駅周辺遺跡（第3次遺跡確認調査）

1. 所在地 姫路市市之郷町3丁目・6丁目
姫路市神屋町3丁目字川原田・川原西・鴻ノ壺
2. 調査面積 908㎡
3. 調査期間 平成7年11月1日～平成8年2月5日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置

姫路市の玄関口、姫路駅周辺で土地区画整理事業が施行されることとなった。工事に先駆け埋蔵文化財の確認調査を、平成5年度から実施することとなった。平成

5・6年度の確認調査で、遺跡を3カ所確認し、遺跡の概要は以下のとおりである。

- ・（仮称）姫路駅周辺第1地点遺跡（姫路市北条・姫路市土地開発公社所有地）
弥生時代前期から平安時代後半 集落跡
- ・（仮称）姫路駅周辺第2地点遺跡（姫路市神屋町・旧国鉄操車場跡地）
弥生時代中期後半から平安時代後半 集落跡
- ・（仮称）姫路駅周辺第3地点遺跡（姫路市市之郷町・12-2号から都市計画街路市之郷線まで）
弥生時代中期後半から平安時代後半 集落跡・寺院跡（市之郷廃寺）

平成7年度は、都市計画街路市之郷線から市川までの区間（東部調査区）と、（仮称）姫路駅周辺第2地点遺跡の西端（西部調査区）との2カ所で実施した。調査概要は以下のとおりである。

〔東部調査区〕

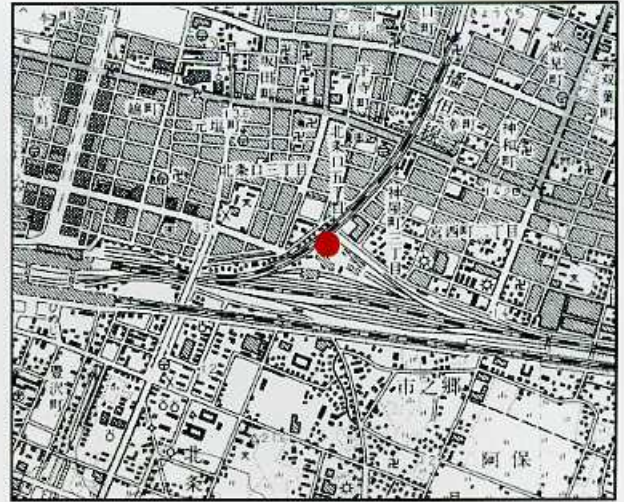
3メートル×3メートルの試掘坪を60カ所設定して調査を実施した。基本的な土層は、分厚いコークス殻の盛土・耕作土・床土をへて、茶褐色砂質土・黄褐色砂質土・暗褐色土となり、砂礫層に達する。茶褐色砂質土を掘り込んだ12世紀中頃の遺構を、坪50溝）・坪43・51・52・54柱穴）・坪16土坑）で確認した。坪16の土坑内から、12世紀中頃の土師器・須恵器・輸入磁器が一括出土した。また、坪44の黄褐色砂質土から縄文時代の打製石斧が、坪8～10の茶褐色砂質土から多量の弥生時代中期後半の土器が出土した。なお、坪55・18・34以東では、砂礫が高まり、遺構は確認できなかった。調査の結果、前年度に確認した（仮称）姫路駅周辺第3地点遺跡は、市之郷線からさらに東へ約220メートル延び、旧市川（『姫路市史』第14巻所収堀田論文の田中真吾神戸大学教授の解析図）へ達することが判明し、下層から弥生土器などの遺物が出土したことから、2時期の調査が必要なことも分かった。

〔西部調査区〕

前年度確認した（仮称）姫路駅周辺第2地点遺跡で、南部と西部との延びを確認するために、南部で28カ所・西部で12カ所の計40カ所の試掘坪を設定して調査を実施した。南部では、坪16・24を除き、分厚い盛土・耕作土・床土・灰褐色砂層（厚さ15～20センチメートル）をへて、砂礫層となる。遺構・遺物は確認できず、遺跡の南端は今回の調査区よりさらに北側である。西部では、盛土・耕作土・床土・暗褐色土をへて、分厚い黄褐色土となる。平安時代後半の遺物が出土し、暗褐色土と黄褐色土とは（仮称）姫路駅周辺第2地点遺跡の遺構面を形成することから、遺跡はさらに西へ延びる。

8. (仮称)姫路駅周辺第2地点遺跡 (第1次調査)

1. 所在地 姫路市神屋町6丁目 (旧国鉄構内)
2. 調査面積 5,200㎡
3. 調査期間 平成7年9月1日～平成7年12月18日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置

平成5・6年度に国庫補助を得て、土地区画整理事業に伴う遺跡確認調査を実施し、遺跡を3カ所確認した。このたび、土地区画整理道路十二所線(幅員20メートル)が構築されることとなった。予定地は前年度に確認した(仮称)姫路駅周辺第2地点遺跡に該当することから、遺跡の保存状況を把握するために発掘調査が必要となった。

当該地は、旧国鉄の操車場の建物などが建っていたことから、建物基礎などで遺跡が破壊されていることが懸念された。しかし、確認調査で弥生時代中期後半から平安時代後半にかけての遺構・遺物を確認したことから、工事予定地(幅員20メートル×延長260メートル)の全面発掘を実施することとなった。

〔北部調査区〕

現地地表下20センチメートルで焼土層(厚さ15～20センチメートル)を検出した。この層から旧陸軍の不発射砲弾や薬莖、折れ曲がったレール・工具・瓦・陶磁器など大量の遺物が出土した。これらの遺物は、強い火を受けて原形を留めないほど変形していたことから、昭和20年7月3日に米軍の姫路空襲の時に散乱した資料の一部と推察される。

焼土層から約80センチメートル下で耕作土を確認し、床土(厚さ15センチメートル・平安時代後半から室町時代の遺物を包含)をへて、黄褐色土に達する。遺構は黄褐色土上面で確認した。弥生時代中期後半の土坑2基・溝3条・円形プランの竪穴式住居跡1棟や、古墳時代の溝1条・方形プランの竪穴式住居跡1棟(布留I式並行期)などの遺構を確認した。奈良時代から平安時代中頃にかけての遺物は遊離して出土したが、遺構は確認できなかった。平安時代後半の土坑11基・溝7条・掘立柱建物跡4棟などの遺構を確認した。なお、調査区北端では、盛土・耕作土・床土をへて、砂礫層となる。遺物も出土せず、遺構も確認されなかったことから、調査区北端が遺跡の北端の可能性が高い。

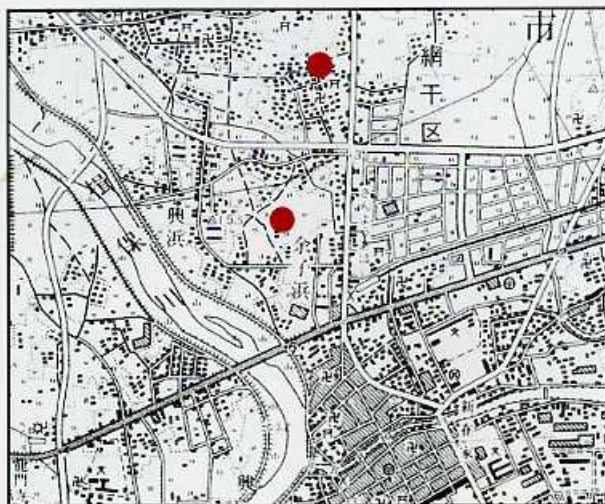
〔南部調査区〕

操車場の建物があったために基礎が深く攪乱が著しかったが、北部調査区同様に遺構を確認した。弥生時代中期中頃の土坑1基、同中期後半の溝1条・壺棺墓1基・円形プランの竪穴式住居跡1棟・土坑3基などを確認した。さらに、古墳時代では、溝2条・土坑8基(土坑5から軟質の韓式土器の鉢が1個体分出土)・方形プランの竪穴式住居跡2棟などの遺構を確認した。また、平安時代後半の土坑5基・溝2条・掘立柱建物跡3棟などを確認した。特に、土坑3からは土師器の皿・塀、須恵器の椀・皿・鉢(魚住焼)・甕、産地不明の焼締陶器の大型甕、輸入磁器の碗、石鍋などの12世紀後半の遺物が一括出土した。

なお、中央部から南部にかけては盛土・耕作土・床土・暗褐色土をへて、砂礫層となる。黄褐色土は認められないが、遺構は暗褐色土を掘り込んで構築されていることから、遺跡の南端は調査区よりさらに南へ延びる。

9. (仮称) 垣内・津市場土地区画 整理事業地内遺跡 (遺跡確認調査)

1. 所在地 姫路市網干区津市場・余子浜・垣内本町・垣内西町・垣内南町
2. 調査面積 476㎡
3. 調査期間 平成7年11月27日～平成8年1月18日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置

姫路市南西部に位置する網干区は、古くから海運の中心地として繁栄していた。魚吹神社や大覚寺などの古社寺や、高田土地区画整理事業地内遺跡などの埋蔵文化財や、条里型地割がよく遺存している地域として知られている。

姫路市網干区垣内・津市場地区で、土地区画整理事業が計画された。平成5年11月4日付で、姫路市都市整備局区画整理部区整第一課から、姫路市教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。平成6年度に事業予定地の32ヘクタールについて調査を実施し、遺物散布地を3カ所確認したことから、平成7年度国庫補助事業として遺跡確認調査を実施することとなった。

2メートル×2メートルの試掘坪94カ所、2メートル×10メートルの試掘溝4カ所を設定して調査を実施し、調査概要は以下のとおりである。

津市場字市場前・字村東・字村西地区では、現在の集落が微高地上に立地し、集落と水田面との比高差は20～40センチメートルで、周囲に水田が広がっている。基本的な土層は、耕作土・床土をへて、砂層や泥土となり、耕作土上面から70～95センチメートル下で砂礫層に達する。遺構は確認されず、磨滅の著しい弥生時代前期末葉から平安時代後半にかけての遺物が出土した。また、奈良時代の布目瓦や平安時代の緑釉・灰釉が出土したことが注目され、これらの遺物が使用された遺跡の追求も急務となった。また、坪12・14のように旧河道内と推察される土層の堆積状況を示すものもあり、これらの周辺も精査する必要がある。

垣内南町南半部の調査が進むにつれて、室町時代の遺物が多数出土した。坪80で備前焼の大甕を東西に2基埋納した遺構を確認した。遺構の性格を把握するために、坪80を中心に2メートル×10メートルの試掘溝を計4カ所設定して調査を実施した。調査の結果、新たに備前焼の大甕を埋納した遺構を1基と、埋甕の抜き跡を3カ所確認した。これらの埋甕は、東西方向に2列整然と埋納されていたと推察される。この遺構には、南と北に幅約50センチメートルの素掘りの溝が伴い、南北の実測値は溝の芯々で2間半(4.5メートル)である。また、溝に沿って礎石と石列も一部遺存していた。甕内部に炭化したアワ・ヒエなどの雑穀類が遺存していた。坪81で大型の土坑、坪84で礎石・石列などの遺構を検出した。なお、坪80で下層から平安時代後半から鎌倉時代中頃にかけての旧河道を検出し、護岸用の杭列を確認した。旧河道内から、土師器・須恵器・輸入磁器・瓦・木製品・漆製品などが多数出土した。

余子浜地区では、坪71で西部から延びる微高地の東端を検出し、16世紀中頃の土師器の皿と備前焼の搦鉢が出土した。

今回の調査の結果、垣内南町南半部で12世紀後半から16世紀後半の遺跡を新たに確認した。遺跡は、新旧二時期におよび、二面の発掘が必要となった。埋甕遺構は、検出状況から東西棟の甕蔵で、アワ・ヒエなどの雑穀類を保存していたと推察される。上層では15世紀中頃から16世紀中頃にかけての備前焼をはじめ、土師器・丹波焼・瀬戸・美濃焼・瓦質土器・輸入陶磁器・鉄製品・銅製品・木製品・瓦などが多数出土した。これらのなかに

は、上手物も多く含まれ、五銚杵・杖・銅製の六器などの仏具に関する遺物も認められる。特に、瓦が多数出土することは注目される。寺院建築は瓦葺きが通例であることから、新たに確認した遺跡は、近辺に中世寺院のあったことを示唆する。



備前焼の埋壺遺構（北から）



東側の埋壺遺構（東から）



西側の埋壺遺構（西から）

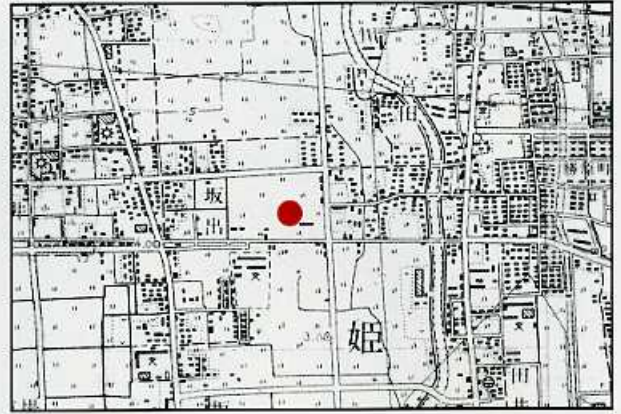
10. 坂出遺跡 (遺跡確認調査)

1. 所在地 姫路市勝原区宮田字中歩
2. 調査面積 24㎡
3. 調査期間 平成7年7月27日～平成7年8月2日
4. 担当者 秋枝

坂出遺跡は、昭和24年に朝日中学校東側の水道管埋設中に発見され、縄文時代から弥生時代の遺物が出土した。昭和58年に体育館新設工事で発掘調査を実施し、縄文時代後半から奈良時代の遺物が出土した。それ以後、調査は実施されておらず、遺跡の範囲や遺構の保存状況などは不明であった。

平成7年3月1日付で、関西電力姫路支店から、変電所建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会があった。当該地は朝日中学校から北東約300メートルにあり、分布調査で遺物も出土していることから、発掘調査の必要がある旨を回答し、後日確認調査を実施することとなった。

2×2メートルの試掘坪を6カ所敷地(2,638平方メートル)内に設定して調査を実施し、遺構が確認された場合は全面発掘に切り換えることとなった。調査の結果、耕作土・床土・礫まじりの灰褐色粘土・暗褐色粘土・青灰色砂層をへて、耕作土上面から1.2～1.5メートル下で砂礫層となる。礫まじりの灰褐色粘土から、磨滅の著しい弥生土器の細片が出土した。



調査地の位置

11. 御着城跡 (第5次調査)

1. 所在地 姫路市御国野町御着字北代
2. 調査面積 36㎡
3. 調査期間 平成7年11月1日～平成7年11月5日
4. 担当者 秋枝

御着城跡は、4次に及ぶ発掘調査の結果、多量の遺物が出土し、本丸と二の丸の一部が保存されている。平成7年7月1日付で、姫路市土地開発公社から、調査依頼があった。当該地には、本丸と二の丸を画する大型の堀が東西に走ることから、3×12メートルの試掘溝を敷地(380平方メートル)内に南北に設定して、確認調査を実施することとなった。

調査区南端で、大型堀の北側を検出した。堀内から土器・木器等などの遺物が出土した。特に、軒丸瓦・軒平瓦はいずれも本丸の井戸内の出土品と同紋である。大型堀の北側から、さらに北へ2.4メートルの空地がある。この区間には、暗褐色土混じりの黄褐色盛土が厚さ約10～15センチメートル認められる。この土は土塁の盛土と見なして間違いなからう。また、土塁の北端で幅6メートル・深さ1.2メートルの堀を新たに確認した。堀内は、一気に埋められた様相を呈し、土師器の小皿、備前焼の播鉢・壺、中国製の青花・白磁、貝殻などの遺物が多数出土した。今回の調査で、北部で土塁と堀とを確認するという新たな知見が得られた。



調査地の位置

●こんなものでました●

犬の土人形

出土遺跡：（仮称）大井川土地区画整理事業地内遺跡

姫路市では今年度も多くの発掘調査が行われましたが、その中でも玉手の調査ではちょっと変わったものが見つかりました。垂れた耳に短い手足。子犬をかたどった小さな素焼きの土人形です。

この土人形は南北に走る溝の中から、備前焼の播鉢やかかわらけと一緒に出土しました。体長4.8センチメートル、高さ3.6センチメートルで、左耳が欠けています。手や工具で形を整える「手づくね（手びねり）」と呼ばれる製法で作られていて、背中には工具でなでたあとが残っています。他の出土例を調べたところ、安土桃山時代のものであることが分かりました。この時代の土人形は、市内では御着城跡について2例目の発見になります。

安土桃山時代の土人形は全国で二十数カ所から見つかっています。中でも、近畿地方は最も出土数の多い地域です。代表的な遺跡は、大坂城跡、堺環濠都市遺跡、県内では尼崎城跡、伊丹市の有岡城跡です。このように発見されている遺跡は、城跡や城下町などが多いようです。

この時代の土人形は大多数が犬をかたどっています。しかも、御着城跡のものなどわずかな例外を除いて、子犬の姿をしています。これらの土人形は、一体何に使われていたのでしょうか。

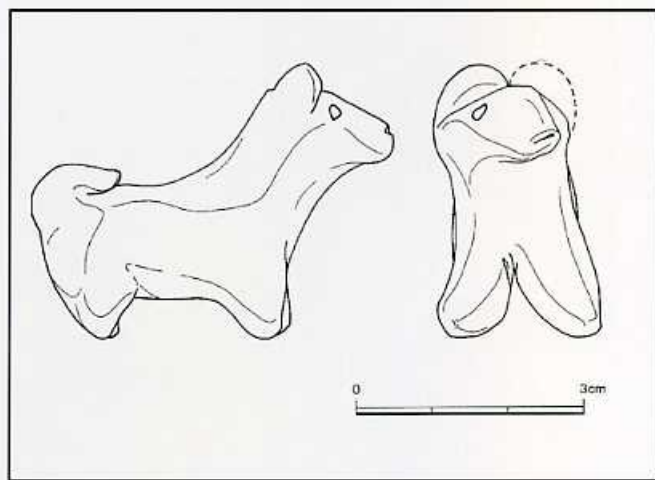
江戸時代、子犬の土人形は安産祈願のお守りだったことが知られています。また、「桃太郎」など、昔ばなしには、人を助けたり守ったりする犬の姿が描かれています。安土桃山時代の土人形も、魔除けのお守りや穢れを乗り移らせる形代として使われていたのかもしれない。



姫路市出土の犬の土人形

（左 大井川出土、右 御着城跡出土）

大井川の土人形は子犬、御着城跡の土人形は成犬をかたどっています。



大井川出土の土人形実測図（S=1:1）

TSUBOHORI

平成7年度(1995)

姫路市埋蔵文化財調査略報

平成9年(1997年)3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課
兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷 内海印刷株式会社
兵庫県姫路市阿保乙367-6

まめだぬきしばこの

30秒考古学



このコーナーでは、考古学や発掘調査の豆知識を紹介していきます。

なんだろう？

なんだろう？

なんだろう？

掘ってある穴は どうやって見つけたの？

まず、この写真をよく見てください。



土の色が違っているのが分かりますか？

しかも、色の暗いほうは、いろんな形をしていますよね。

こたえ：裏返してみてください。

こたえ

これが、全部掘った後の写真です。

表の写真で土の色が暗かったところが掘り下げられています。

暗い色の土は人間が一度掘り返したところのあるところです。

暗い色の土と明るい色の土の境界を見つけ、暗い色の土だけを掘り返せば、その穴がどんな形をしていたかがわかります。



この形を見つけるには、表の写真のように地面を平らに削っていかなくてはなりません。

ただ削るだけでは、色の違いはうまく出ません。

なかなか「技術」というか「コツ」のいる仕事なんです。



■平成7年度 姫路市埋蔵文化財調査略報付録

発行／姫路市教育委員会 文化部 文化課

姫路市安田四丁目1番地